

寄稿「私の青春時代」

賀茂高等女学校昭和 20 年卒

和田（上沖）和子

【学生時代】

賀茂郡入野村で生まれ、一クラス 50 人の小学校で学んだ。毎年、先生から賞状を頂いて家に帰ると、三つ上の姉が、誇らしげに母へ渡していたのが印象に残っている。

小学校を卒業して賀茂高等女学校へ入学する。この学校は現在、男女共学であるが当時は厳しい県立の女学校で村からは二人ぐらいしか入学できなかった。急な坂道の峠を越えて約 40 分かけて白市駅まで出る。母は早く起きて弁当を作り、私も食事をして行くのだが、間に合いそうにない時は食べながら駅へ向かったこともある。

一年生に入学しても勉強は半分だけ、あとは勤労奉仕の毎日。田んぼの側溝を掘って焚き木を埋めてまた土をかける。広島市からも修道中学の生徒が来て同じことをしていた。春は田植えである。私は子供のころから大人に混じってやったことはあるが、西条の田んぼは蛭が多くいて、田に入るとすぐ足に付いて射す。いやなことばかりだった。一方、秋は稲刈りでそれは楽しかった。その家の人が料理を作ってくださりみんなで食べる。家に帰ると父が「うちも出征軍人の家なのに、なんで家の用事をせんで、外の仕事ばかりさせるんかの」と愚痴を言う。私もそう思うが仕方がない。

【勤労働員】

四年生の五月、勤労働員で呉市広の海軍第 11 空廠へ行く。横路の宿舎には方々の女学校から学生が来ていた。起床五分前には服を着替えて寝具をたたみ、廊下に並んで点呼を受ける。号令がかかると我先に走って洗面所に行って歯磨き。部屋に帰ると当番制で食事を運ぶ。食事が終われば同じく当番制で食器を洗う。

最初の数か月はグラウンドでの訓練である。鉢巻を締めブルマをはいて、裸足のまま、前に後ろにしっかり足を上げて歩調を合わせる。最後は「右へならえ」で一番後ろの人は走って並ぶ。夕方になると足が攣って、宿舎二階の人（女子挺身隊の人）たちは痛さで悲鳴を上げている。みんな可哀そうなこと。

ある日、一人用の蚊帳を作るというので、課長さんの説明を聞きにいったら、私は床に置いてあった「針山」を誤って踏んでしまった。課長さんは私を自転車に乗せて病院へ連れて行ってくれ、幸い糸がついていたのでお医者さんに麻酔や手当をしてもらった。その課長（県女の五年生）さんは私にとっても良くしてくださって、お菓子やいろいろな配給品を持ってきてくださった。それでも、夕方、横路の宿舎から土手を散歩する人を見ると淋しいやら家が恋しいやらで自然と涙が出た。

約三か月の陸上での訓練も終わり、いよいよ職場へと行く。第一県女は一階の職場、私たちは二階の工場になる。コンクリートの工場内に素板を一枚置いたその上で

仕事をする。大きな研磨機を使って飛行機の発動機部品を研磨する。水が流れる中、部品を奥へと送っていくと、時々、部品の破片が飛んでくることがあった。海軍の若い係の人に作業を教わる時には緊張したものである。時々休憩はあるが、ほとんど立ちっぱなしで、腸が下がるためなのか便秘になるし、月のものも半年くらい止まってしまった。冬はとても寒く、トイレに入ってベルトを締めていた。三交代制で夜勤もする。仕事が済んで宿舎に帰り、お風呂に入るのが一番うれしかった。食事は魚一片と腐ったような玉ねぎの味噌汁のみである。

その後、あちこちで空襲が始まった。呉は海軍基地や軍関係の工場があるので B-29 が爆弾を落とす。グラマンは灰が峰から急降下して人を追いかける。顔が見える位まで追ってくる。宿舎の防空壕は小さくて大勢では入れない。横路の隧道（トンネル）めざして走るが、間に合わないので途中の橋の下へともぐりこむ。「もう宿舎から逃げない。お母さん」と言って泣く友達もいる。

【敗戦】

さらに空襲がひどくなると、作業は第 11 空廠から宿舎近くの隧道内に機械を移して行った。作業は三交代制だったので、時には一日半休みがとれる時がある。中隊長（女性）さんにお願ひし、総勢五人で草鞋を履いて、がけ崩れで通れない道を這い登って停留所まで歩き、そこからバスに乗って西条駅まで行った。西条駅に着いたら

「今から重大放送があります」とのこと、ラジオからの天皇陛下のお言葉で終戦が知らされる。これでは家には帰られぬ。すぐに切符を買って海田を通過して広に帰る。皆はもう荷作りに、そして別れのあいさつに忙しい。機密を守るために前日までは「よろい戸」が閉まっていたけど、帰りの汽車の「よろい戸」は全開で呉の海が清々しく見通せた。海田を回り、白市駅に着いた時はもう暗くなっており、途中の家で電灯を借りて暗い峠道を一目散に駆け下りて家に帰った。

動員中は食事も良くなかったし、栄養失調で体のあちこちが痛かった。母の話では、己斐の姉のところは家が壊れて裏の横穴の防空壕に姉と二人の息子、そして義理の母の四人が、食べるものもなく入っているとのことであった。家に帰った私はその翌日、リュックを背負って白市駅まで行き、己斐の姉（次女）の家に荷物を届けるとすぐに引き返した。やがて、義理の兄を除く姉一家四人が疎開して来た。義理の兄は東洋工業で広島市の被爆者の受け入れを続けていた。その後、呉からもう一人の姉（長女）が子供三人と疎開して来た。いっきに大家族である。私や母は皆の世話、そして農作業に忙しく、体調不良の日々が続いた。

【結婚】

昭和 26 年、大竹紙業（現 日本製紙）に勤務する夫と結婚。昭和 29 年には長女を出産し、その後、昭和 32 年に次女そして昭和 34 年に長男が生まれるも、長男は肺炎

で短い命を終えてしまったことを今でも大変後悔している。その翌年の昭和 35 年に生まれた次男とともに今は幸せに暮らせていることに感謝している。

(令和 3 年 12 月)